

16. あなたの神、主は、きょう、これらのおきてと定めとを行なうように、あなたに命じておられる。あなたは心を尽くし、精神を尽くして、それを守り行なおうとしている。
17. きょう、あなたは、主が、あなたの神であり、あなたは、主の道に歩み、主のおきてと、命令と、定めとを守り、御声に聞き従うと断言した。
18. きょう、主は、こう明言された。あなたに約束したとおり、あなたは主の宝の民であり、あなたが主のすべての命令を守るなら、
19. 主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。そして、約束のとおり、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。

## 説教

申命記 26 章 16-19 節は、これまでの教えの締め括りです。

「あなたの神、主は、きょう、これらのおきてと定めとを行なうように、あなたに命じておられる。」(16) これまで教えられてきたことは、守っても守らなくてもどうでもいいものとしてダラダラ教えられてきたわけではありません。これを守り行えば生きるといういのちのことばとして、神はこれまでモーセを通して律法を教えました。守れば生き、そうでなければ滅びるのですが、そうとだけ語ってあとはほったらかしにするというのではありません。守って生きるよう「命じます」。「これらのおきてと定めとを行うように、あなたに命じ」ます。そうして、主の教えを守り行うよう契約を結ぶのでした。

主の命令を受けて、人々の応答が記されます。「あなたは心を尽くし、精神を尽くして、それを守り行なおうとしている。」(16) 神が教え、人が全身全霊でそれを守る、ここに神と人の契約関係が要約されています。こうして、いよいよ契約が結ばれることとなります。

「きょう、あなたは、主が、あなたの神であり、あなたは、主の道に歩み、主のおきてと、命令と、定めとを守り、御声に聞き従うと断言した。」(17) 「断言した」の直訳は「(相手に)言わせた」で、イスラエルが主に「言わせた」ということになります。少しわかりにくいのですが、これは、契約を結ぶ二人がそれぞれ相手に契約の条件を声に出して言わせるという、当時の世俗の習わしによるものです。これを結婚式に喩えると、新郎が妻に対する自分の責任を妻に言わせるということになります。自分の責任なのですから自分で言えばいいと思うのですが、自分で唱えて自分の責任を自覚するのみならず、わざわざ相手に言わせてそれを聞くことで、もはや相手の目を誤魔化して逃げられなくなる、ということなのでしょう。結婚式でも、このようにして自分の責任を相手に言ってもらうようにすれば、より強烈で鮮明な誓約の儀式となるかも知れません。なぜなら、私たち罪人は、自分の責任よりも相手の責任に敏感だからです。自分の責任は棚に上げて、相手が義務を果たさぬことを断罪するのに熱心です。ですから、自分の責任を相手に読み上げてもらえば逃げられません。

こうして、自分が契約を結ぶ相手に対する責任を「言わせる」ことで、正式に契約が成立します。ここでは、「きょう、あなたは、主が、あなたの神であり、あなたは、主の道に歩み、主のおきてと、命令と、定めとを守り、御声に聞き従う」とのイスラエルの責任を神に「言わせ」ます。主だけが自分の神であり、「主の道に歩み、主のおきてと、命令と、定めとを守り、御声に聞き従う」と、よりによって神に「言わせる」のですから、実に強烈です。

もう逃げられません。「断言した」との意識に相当するリアリティーです。

人々の「断言」を受けて、主もまた「明言」なさいます。「**きょう、主は、こう明言された。**」(18) この「明言した」と訳されているのもまた、実は「言わせる」という表現です。18、19節は、神の教えを忠実に守る者に神がどのような祝福をくださるかという内容が記されているのですが、これを神が人に「言わせる」ということになります。これにより神は、人が読み上げる祝福の約束を必ず果たさねばならず、逃げられません。そして人は、神が必ず果たしてくださる祝福の約束を一つ一つ口にしながら確認することにもなります。自分が何者であり、神の教えを忠実に守り行なうならどのような祝福を神が約束してくださるのかをリアルに確認します。「**きょう、主はこう明言された。あなたに約束したとおり、あなたは主の宝の民であり、あなたが主のすべての命令を守るなら、主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。そして、約束のとおり、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。**」(18-19)

まず、「あなたは主の宝の民だ」と言います。「宝」と訳されている言葉は、「価値ある財産」「特別な宝物」「金銀などの財宝」を意味します。特別に価値ある財産、宝物と言え、お金、預金通帳、有価証券、宝石、高価な骨董品、美術品など、いろいろあるでしょう。金目のものでなければ、我が子が宝、愛妻が宝という人もいるでしょうし、沖縄なら「ぬちどう宝(命という宝)」です。いずれにせよ、その人が何より大切にしているもの、それが「宝」です。イエスさまは、「あなたの宝のある所にあなたの心もある」と言われました(マタイ 6:21)。それがその人の最も価値あり関心あるものなので、気になって仕方ありません。一緒にある時も離れている時も、心はそこにある、いつもそのことばかり考えてしまう、そこに関心が集中する、これが「宝」です。

神は、イスラエルに「あなたは主の宝の民だ」と言われます。神が大切に思っているもの、価値あるもの、それも最高に価値あるものとして「主の宝」だと言うのです。「おまえなんかゴミだ」「クズだ」というのではありません。「おまえなんかいい方がいい」とか「いてもいなくても同じだ」というのでもありません。「宝」です。それはなくてはならない不可欠なものです。神にとってはかけがえのない、この上なく大切な「宝」です。いのちとも言える「宝」です。神は預言者イザヤを通して言われました。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ43:4) 神が何よりも愛して、それ故に一番大切な「宝」、それが「主の民」イスラエルなのです。

皆さん、神に愛され大切にされている「主の宝の民」だ、という以上にすばらしい事実はありません。神に愛され認められているのですから、人から認められようとか愛されようとか、そのために自分の価値を高める努力をする必要はありません。他人より立派に偉くなろうと出世を志す必要もありません。なぜなら、神に愛されていることで既に十分に価値ある存在だからです。「宝」です。それも「主の宝」だというのですから、これは世界で最もすばらしいことです。これ以上に価値あるアイデンティティーはありません。反対に、どんなに世界中の人から称賛されて宝のようにもてはやされても、神に見捨てられたら、どうでしょうか。世の人から必要とされても、神にゴミ扱いされて捨てられたとしたら、恐ろしいことです。主の民とされている皆さんは、自らが神に愛され、「主の宝の民」とされていることに、心から満足し、感謝しましょう。これは何よりも幸いなことなのです。

これだけでも十分に感謝なことなのですが、これに加えて、「**あなたが主の命令を守るなら**」、次の祝福を神は約束なさいます。「**主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高く上げる。そして、約束の通り、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。**」「聖なる」とは、神のものとして特別に取り分けられることを意味します。結果、主が造られたすべての国民にはるかにまさるものとして「国々の上に高く上げ」られます。ここでは、神の目にどうかというより、世に於いて、あるいは世界中の国々と比較して、人の目にどうかということになります。

イスラエルは、特別な神の聖なる民として「賛美と名声と栄光」に与るといいます。すなわち、世界中の人々から称賛され、名を知られ、彼らの「栄光となる」のでした。そして、その意味で「国々の上に高く上げ」られるのですから、要するに、世界一称賛され、有名になり、栄えとなる、ということになります。「栄光となる」とは「装飾する、美しくなる、輝く、栄誉を得る、尊敬される、区別する」という意味です。世の人々の目には、特別に美しく装飾され、尊敬されて、名誉となるのでした。

勿論、もともとこれらは、神に特別に愛されている故にそうなるわけですが、でも、「神に愛されている」という事実は、世の人に見えるはずがありません。それで、どのようにして「これはまさしく神の民だ」と世界中の人から「賛美と名声と栄光」を受けるかといえば、それは彼らに委ねられた神のことば、すなわち神の教え、律法によるのです。見た目はイスラエルも異国人もそれほど違いはないのですから、違いがあるとすれば、それは、結局は生き方です。神の民イスラエルが歩むのは「主の道」です。世の人の道とは違います。彼らが守り行うのは「主のおきてと、命令と、定め」です。世の習わしではありません。彼らが聞き従うのは、世の声ではなく、主の御声です。彼らは主の「御声に聞き従う」のです。こうして、神に特別に愛されている主の民は、主の教えを守り行うことで世界に神の栄光をあらわし、それにより称賛と名声と栄誉を受けるのでした。

ここにいます兄弟姉妹は、神に愛されている「主の宝の民」です。主の御声に聞き従って、主の祝福を受け、この世界で最も称賛と名と輝きを発するよう、主の御名により祈ります。